岐阜がつながる 中山道ぎふ17宿 歩き旅

御嶽宿（みたけ）～細久手宿（ほそくて） 約11.8km

中山道ぎふ17宿とは?

江戸時代に整備された五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結ぶ重要な街道で、全長135里32丁（約534km）に69の宿場が置かれました。そのうちの17宿、126.5kmが岐阜県の美濃地方を東西に横断しており、今も往時の面影を色濃く残しています。その土地の歴史や文化、隠れた魅力の発見を楽しむ街道観光は岐阜県の誇るべき観光資源であるとして、平成25年2月に「岐阜の宝もの」に認定されました。

Topics

聖母マリア像

昭和56年（1981）、謡坂地内で道路工事中にキリシタン信仰の遺物が偶然発見されました。その後の調査でも、小原、西洞、謡坂地内から数多くの貴重な遺物が相次いで発見され、この地に多くのキリシタン信者がいたことが判明しました。幕府の過酷な弾圧の中で発覚することもなく信仰が続けられたのは奇跡とも言え、全国でも非常に珍しい例です。発見された遺物は、御嵩の資料館（中山道みたけ館）に展示されていますが、このマリア像の建立には、当時の辛苦に耐えた先祖の慰霊や、地域の幸福と平和を願う多くの人々の協力がありました。

御嶽宿

多くの仏像を所蔵する蟹薬師・願興寺の門前宿（町）。当時28軒の旅籠があり、600人の人口があったとか。江戸時代、東に向かう道程でこの後に続く細久手宿、大湫宿など険しい山道ルートに向かう難所を控えた最後の休憩場所として、旅人が多く逗留した宿場でした。中山道みたけ館内の郷土館では、御嵩町が宿場になる以前の縄文時代から近世に至る歴史的出来事の数々も知ることができます。地方の小さな町が、時として全国的に影響を及ぼす重要地点だったという歴史など、知れば知るほど興味が深まりそうです。

商家「竹屋」

江戸時代末期、本陣職を務める「野呂家」から分家した豪商。御嶽宿にあった2軒の商家のひとつで、金融業、繭、木材、綿布から、後年にはアメリカ製自動車の輸入販売や名古屋での借家街「竹家街」の経営、佐渡金山への投資など現代の総合商社のような商いを行っていました。

平日10:00～18:00　土日祝9:00～17:00

月曜・第3火曜・最終金曜・年末年始休館　入館無料

耳神社

耳の病に霊験ありと伝えられる小さな社。昔から、耳の悪い人がお供えしてある錐（きり）を1本借りて耳にあて、治ったらお礼に年の数の錐で編んだすだれを奉納するという、とても珍しい習わしがあり、現在も奉納されたすだれが絶えることがないそうです。元治元年（1864）、尊皇攘夷を掲げた武田耕雲斎率いる水戸天狗党が中山道を西へ向かう途中に、耳神社の幟を敵の布陣とみて抜刀して通ったという逸話も残っています。

大黒屋

細久手宿の本陣・脇本陣が手狭になり、他との合宿を嫌った領主の尾州家が、問屋役酒井吉右衛門宅を「尾州家本陣」として定めたのが大黒家のはじまりでした。軒廂付切妻造の2階建で、両端に本卯建を上げ、2階が1階に比べてかなり低くなっていることが家の古さを表しています。宿場時代の遺構と見られていましたが、奥座敷前の縁束に「安政6年（1859）12月6日清七　米9合」の墨書銘が発見され、安政5年（1858）の大火の直後に再建された家であることがわかりました。武士や高貴な客を泊めるための創意を凝らした造りのこの宿は、今も旅館として営業を続けており、宿泊することができます。

細久手宿

細久手宿は、海抜420メートルの山中に発達した、江戸から48番目の宿場で天保14年（1843）の記録によると、戸数65軒を数え、うち24軒が旅籠を営んでいたようです。宿のはじまりは、徳川家康に重用されていた美濃奉行の大久保石見守長安が土地の豪族の国枝与左衛門に新しい宿をつくるように命じ、与左衛門は慶長11年（1606）に七戸の家を建てました。ところが、慶長14年（1609）に何者かによってその家を焼かれてしまい、石見守は公儀からのお金で家を建て替えさせたといいます。